

# 江戸時代の花たち

6

小笠原 亮

書物に見る江戸時代の園芸文化



「花菖蒲培養録」嘉永六年菖翁自筆  
千葉大学園芸学部蔵本の近代写本

花菖蒲の文献3種  
左 菖花譜 近代写本 / 中 花菖蒲花名 近代写本 /  
右 花菖蒲培養録 弘化二年菖翁著 近代写本



「花菖蒲培養録」の見開き  
左 宇宙(ウチュウ)/右 霓裳羽衣(ゲイショウウイ)

## 「花菖蒲培養録」

雑花園文庫蔵

著者は松平定朝、幼名左金吾、のち菖翁と号す。安永三年生まれ、安政三年八三才で去る。江戸幕府の旗本で二〇〇〇石を領し、西の丸大目付、京都禁裡守護職、大坂町奉行、幕府江戸大目付などの要職を歴任するかわら、親の趣味でもあった百花の培養を好むようになり、そのなかに花菖蒲があり、老を養う友と覚え定めて栽培に力を入れるようになったことを本書の序文のなかで記している。

ハナシヨウブは、天明の初め頃より実生を始めたが、最初のうちは親と変わらぬ花ばかり咲いて大して魅力のある花ではなかったが、ある人の勧めで奥州安積沼のハナカツミという花を得て実生をするようになってから急速に変化が現れ、三英から六英となり、八重咲き、椰子咲きなどが出現し、花も大きくなり、色彩も態々現れるようになった。そうしたなかで、自分の目に叶ったものが一〇〇種以上にもなり、またこの花を好む人々が多く現れ、栽培が流行するようになったので培養法などを伝えようと筆を取ったとし、年間の栽培法を詳細に記述してある。

また京都在任中のできごととして、本文のなかで、「文政の初め長安(京都)の守衛に命ぜられ彼の地に在ること十有餘年 官舎の園中に此花を養い実生培養なし 秀たる花のみ撰びて大君(天皇)へ奉しに測(はか)るる観(み)まし〜 匂當之内侍(天皇の身近に仕える女官)へ伝へ申して叙慮の辱を蒙りたり 是多年花を愛する一得か 恐喜するに餘りあり」とハナシヨウブを献上した時の様子も記している。

菖翁一代の名著である。( ) 内著者補